

PROFILE

竹 森 重

東京慈恵会医科大学分子生理学講座



慈恵医大の竹森です。

今は分子生理と名乗っていますが、私がこの大学の学生のころには第一生理として親しまれていました。大学を卒業した私が参加した頃、講座は増田允先生から馬詰良樹先生に引き継がれたばかりで、スタッフ平均30歳くらいの若々しい研究室でした。夜な夜なお酒を囲んで議論を楽しみました。やがて酔った馬詰先生がちょっと深い落ちのある笑い話で我々の腹をよじれさせたものです。三菱生命研にいらした藤目智先生がおいでになると、そこに物理の味付けがついてまた一段とおもしろいさかなになりました。

毎朝、今日はどのように研究しようかとそればかり考えて研究室に来ました。難解だった医学を学ぶ医学生時代から考えると、骨格筋を対象の一つ一つ明確にしようとする研究の毎日は夢のようでした。そんな昼の研究室には名取禮二先生が時折スキンドファイバーの実験をしに来ました。実験動物の用意が私の務めでした。実験が終わると、名取先生が皆を外へ飲みへ誘ってくれることもしばしばでした。私自身の実験が終わらなくて遅れて駆けつけますと、実験の首尾はどうだったかと名取先生。「いえ、ちょっとうまく行かなくて」と申しますと「んっ！それはおめでとう！」と祝福されました。自然こそが先生であることを名取先生は最後まで貫かれました。

今、医学生さんたちを取り巻く環境は私の時代とまるで違います。在学中に受ける教育も大きく変わりました。教養課程が標準化されていた私の時代には、理科系なら大学によらずほぼ同等レベルの教育を受けられました。理工学に進んだ兄たちに負けない教育を医学進学課程（慈恵医大の教養課程）で私も受けられることを、心から嬉しく

思ったものです。その後いろいろな問題点があって大学教育が今日のように変容してきたことを了解していますが、この変容の中で失われてしまった昔のたくさんの良い点も忘れられずにいます。

ちょうどゆとり教育世代にかかる子供を二人育てました。一人は理科系の大学院で活き活きと研究を楽しんでいます。もう一人は文科系の大学で好きな分野の研究に没頭しています。私自身が彼らと同じ世代を生きていたら研究者になりたいなんてこれっぽっちも思わなかったろうと思っていたので意外でした。与えられた環境が違って、その中で子供たちがたくましく生きていたことに気づかされました。

私の子供たちと同じ世代の学生さんたちがいま医学部の高学年に学んでいます。彼らは今の教育課程の中で学問や研究をどのように受け取っているのか私には想像が付きません。それでも地味な骨格筋研究に深い関心を寄せてくれる学生さんたちが少なからずいます。昔話の郷愁に浸っている場合ではありません。高等学校までの中等教育と、医学専門教育とをつなぐタイトな基礎医学教育のなかに、良き教養教育をできるだけ取り込み、学問・研究の魅力をうまく伝えなければならない立場にあることを自覚します。改めて気持ちが引き締まりました。

略歴

- 昭和60年 東京慈恵会医科大学卒業、同学第一生理学教室助手
- 平成4年 講師
- 平成19年 同学分子生理学講座准教授
- 平成22年 同教授